

リチャード・クレイダーマン

with スtringス・トリオ & パーカッション

RICHARD CLAYDERMAN 2016 with Strings Trio & Percussion

リチャード・クレイダーマンが日本のファンにとって「5月に会える人」となってから、30年以上。しかし、彼が1980年の初ジャパン・ツアー以降、毎年欠かさず日本で公演を行っていることは、不思議と一般にはあまり知られていない。そのため「クレイダーマン」という名前に対する反応は「懐かしい」「家にレコードがある」「昔、ピアノでよく弾いた」といったものが多く、誰もがよく知っているが、やや遠い日の存在になっているようだ。

デビュー当時のクレイダーマンは、まだ20代半ばであった。金髪、青い目、穏やかな笑顔の美青年がシックな衣装に身を包みロマンティックなピアノ曲を演奏するのだから、女性たちが注目しないはずがない。「ピアノの貴公子」がコンサートを行えばチケットは完売。会場には花束を手にした女性たちが詰めかけ、一部の男性客は居心地悪そうにしていた。インターネットのない時代、チケットはプレイガイドや会場窓口に並んで買わなければならない。若い女性や母娘のファンたちが徹夜で行列を作ることも珍しくなかった。1983年5月、東京の後楽園球場（現在の東京ドーム）に3万5千人を動員した「星空のコンサート」は、今も世界中のファンの間で伝説のように語り継がれている。

日本では80年から年に1回、時には2回のツアーが行われ、ジャパン・ツアーは2016年で実に39回目を迎える。世界を駆け巡るクレイダーマンだが、毎年欠かさずコンサートが行われている国は現時点で日本と中国以外にはない。フェイスブックの彼のページで公演スケジュールが更新される度に、各国のファンから「いつ私の国に来てくれるのですか?」「もう何年もあなたの演奏を生で聞いていません」とコメントが入る。終演後の「また来年」が当たり前になっている日本のファンは、実はこの上なく幸運なのだ。

デビューから35年を過ぎても世界から引く手あまたのピアニスト、クレイダーマン。しかし、当初は若さとルックスばかりが目目され、演奏家としての評価は後回しにされていた。それまでのムード音楽界を担っていたのはポール・モーリア、レイモン・ルフェーヴルといった品のいい中年紳士が指揮する楽団であり、ファン層の中心は音質を追求しオーディオ機器にまで凝る、ややマニアックな男性たち。ところがクレイダーマンの登場ですべてが変わった。ファンの90パーセント以上が女性で、ピアノを奏でる王子様に黄色い声援を送り、ステージに駆け寄る。イージーリスニングの世界にまさかのアイドル誕生である。従来の音楽マニアたちは、戸惑いつつもコレクションとしてクレイダーマンのアルバムを購入し、母親や彼女を喜ばせるために公演チケットを入手したが、彼の音楽性を論ずる人は少なかった。

80年代には彼に続けとばかりに美形のアーティストたちが次々と現れたものの、今も活躍しているのはクレイダーマンだけだ。ピアノと聴衆に対して真摯に向き合う彼は、生演奏にこだわり、コンサートのため世界を飛び回る。これまでの公演回数は2,000を超え、述べ600万人以上が足を運んだ。この数字こそが彼の實力の証なのである。

事務所やレコード会社が貴公子イメージを強調した面はあるにせよ、本人はあくまで丁寧で情感豊かな演奏スタイルを貫いてきた。年齢を重ね、60歳を過ぎた今、彼は過去のイメージから解放され、音楽を心から楽しんでいる。その様子はステージにも明確に表れており、客席にはかつて彼を敬遠していた人々、特に男性の姿が目立つようになった。

公演の度に誰よりも早く会場入りし、ピアノの状態を確認すると練習に没頭するクレイダーマン。彼の躍動感あふれる演奏は、アルバムから受ける穏やかな印象をいい意味で裏切ってくれる。「ピアノと会話している」と評される彼の豊かな表情を見られるのも生の醍醐味だ。先入観を取り払い、一人の円熟したピアニストのライブを観に、ぜひ足を運んでみていただきたい。

倫永 亮

